九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

文心彫龍(二)

目加田, 誠

https://doi.org/10.15017/2556522

出版情報：文學研究. 35, pp.65-77, 1946-03-30. 九州文學會
バージョン：
権利関係：

KYUSHU UNIVERSITY

文心彫龍（二）

目加田誠

徵聖第二

凡そ禮樂を創始する者を聖者と曰ひ、その本義を識つて之を傳述する者を明者と曰ふ。仲尼が人の性情を陶鑄されたる功効は、顏淵以下孔門の賢れたる人々の上に現はされたが、而も「夫子の文章は得て聞くべし」とするからは、後世と雖、聖人の御こゝろは、その殘されたる文辭に現はされてゐる筈である。先王の聖教は方牘簡策に書きしるされ、夫子の風采はその法言（のりのことば）に溢れてゐるのだ。

樂記に「禮樂の情を知る者は能く作り、禮樂の文を識る者は能く述ぶ。作者を聖と謂ひ、述者を明といふ。明聖とは述作の謂也」といふ。文王周公はよく禮樂を創始し、この世に文化を施いた聖人であつた。孔子は自ら「述べて作らず」と曰はれたごとく、この先王の道を集大成して傳述し、顏淵以下七十子の徒の性情を陶鑄された。我等今日直接に夫子の薫陶を受け得ずとも、而も子貢が「夫子の文章は得て聞く可き也」と曰つた如く、その文章は後世と雖、幸に尙聞くことが出來る。何故なれば文武周公の聖化は尙書きものに殘され、孔子のおもかげは、その今に

傳はる法の言に溢れてゐるからである。易下繫に「聖人の情は辭に見はる」とある通りである。

されば夫子は、遠く堯の世を稱えては、「煥乎として文章有り」と曰はれ、近く周代を褒めては、「郁々乎として文なる哉、吾は周に從はむ」と曰はれた。此れ政化に文を貴ぶの證據である。又孔子は、鄭伯が陳に入るや、その文辭によつて功を爲したものとし、宋人が肉を切り俎にのせて趙文子を享するや、この度の禮に文辭多しとて特に記錄させられたのである。此れ事功に文を貴ぶの證據だ。或はまた鄭の子產を褒めては、「言は以て志を足し、文は以て言を足す」といはれ、ひろく君子を論じては、情は信あれ、辭は巧なれといはれた。此れ身を修むるに文を貴ぶの證據である。然らば志足りて言に文あり、情信にして辭巧なることこそ文章を深く身に乘り持つ金科玉條なのである。

孔子は何よりも文といふことを尙ばれた。その夫子の意志文采は孔子ののこされたる言葉の中に明かであり、政化事功、修身すべてに文を貴ばれた夫子の意を徵することが出來やう。堯の世を煥乎として文章ありといひ、周代を郁々乎として文なる哉といはれたその文とは、禮樂制度の文化、廣義の文である。春秋襄公二十五年左傳に、「仲尼が子產をたゝへて曰はれた、古きかきものに、言は以て志を成し、文は以て言を成すとある。言はねば誰もその志を知らず、言つてもことばに文がなければ遠くには響かぬ。晉が霸者となり、鄭が陳に入つたがごとき、ひとへに文辭の功である。辭は愼みたいものだと。」之は言辭を巧みにして功を建てたことをたゝへたのである。又左傳襄公二十七年に、宋人が趙文子を饗するに、司馬が折俎を置いた。仲尼はこの饗宴に於て、賓主の間に法とすべき文辭が多く交はされたが故に、特に之を弟子に記錄させたといふ。此れ亦孔子が文辭を尙ばれたことの證據である。廣義の文、狹義の文、何れも孔子が如何に文を重んじられたか、之を孔子の遺語によつて證したのである。但

し孔子は決して空文虚辭、徒らなる修飾の言をよしとしたのではない。それは禮記の表記に孔子の語として「情は信ならんことを欲し、辭は巧ならんことを欲す」とあるやうに、内に信實の情志あり、之を表現するに巧みなる修辭を以てして始めて眞意を達し、文采見るべきものゝあることを云つたのである。この信實の内容と、巧妙なる表現とが相俟つことこそ、凡そ眞の文章を身にそなへる金科玉條である。

かくて周ねく日月陰陽の道を嚙み盡くし、不測の變化推移のきざしを微妙に極めつくしてこそ、文はよく法をなし、思は當らざるはない。それについては、或は言を簡にしてその旨を達し、或は文を博くしてその情を該し、或は條理を明らかにして體制を立て、或は趣意を隱してその作用をひそませる。されば春秋は一字を以て褒貶し、儀禮の喪服は輕きを擧げて重きを含ませる。これ言を簡にして旨を達するものである。邠風七月の詩が多くの章句を積み重ねたる、禮記の儒行篇が辭說を繁縟にせる、これ皆文辭を博うして情をつくしたものである。易にいふ、文字によつて萬事を決斷すること夬の卦に取ると。又いふ文章の明晰なること離の卦に象ると。これ條理を明かにして我制あらしむるものである。易の四象は意義精深にしてにはかに知りがたく、春秋の五例は微辭を用ひて露はならず、此れ趣旨を隱してその用を藏するものである。されば以上の如く、文章は、繁簡その形を殊にし、隱顯その法を異にし、抑揚變通時に隨ひ機に叶ふを知る。之をもし周公孔子の經典にその證を求めてゆくならば、則ち文章に師有りといふ可きである。

文に定格なく、繁簡隱顯皆その時のよろしきに叶ふを要し、その手本は實に經典に備はる。孔子は春秋に於て僅か一字の筆法に褒貶の意を含め、儀禮の喪服の記載は輕き服喪をあげて、より重き服喪をその内に含ませてゐる。即

ちこれ簡言達旨の法。詩經邠風七月の詩は周公の作と言ひ傳へ、八章、章毎に十一句、國風の中でも特に長篇で、農村一年の行事を詳細に詠ふてゐる。又禮儀の儒行篇は十五の儒行を並べ說いて、之亦博文該情の好き例である。易下繫に、「上古は繩を結んで治む。後世聖人之を易ふるに書契を以てし、百官以て始まり、萬民以て察す、蓋し之を夬䷪に取る(韓注。夬は決也。書契は萬事を決斷する所以也)とあり、又離䷝の卦は日であり、火であり、重明の象。象に曰く、離は麗也。日月は天に麗き、百穀艸木は土に麗き、重明以て正に麗き、以て天下を化成すと。象に又曰ふ、明兩び作るは離、大人以て明を繼ぎ四方を照すと。卽ち文章明晰の象。之決斷明晰、理を明かにして體を確立するを尙ぶ意。又易繫辭に兩儀四象を生ずといふ四象とは ⚌⚍⚎⚏。繫辭に云ふ、易に四象あり、示す所以と。疏に莊氏を引いて、實象假象義象用象を四象と爲すとあり。或は四象を以て春夏秋冬の象とし、或は老陽少陽老陰少陰の象となすも、いづれその義は深くして顯ならず。春秋は五例(杜預春秋傳の序、一曰微而顯、二曰志而晦、三曰婉而成章、四曰、盡而不汙、五曰、懲惡而勸善)ありといへど婉曲にして露はならず、之隱義藏用の書例である。かくの如く、凡そ周公孔子の手に成るといふ六經の文には、繁略隱顯夫々時に適した書法が示されてゐる。後人はたゞこゝに法を微するならば、文に師有りといふべきであらう。

されば劉向は文を論ずるに必ず聖人に證をとり、匡衡は學を勸むるに必ず經を宗とした。易に云ふ、「物を辨じ言を正して辭を斷ずれば則ち備る」と。又書に云ふ、「辭は體要を尙び、惟れ異を好まず」と。されば知る言を正すは辨を立つる所以。要を體するは辭を成す所以。要を体して辭成れば、徒らに異を好むの尤なく、言を正うして辨別明らかなれば辭を斷ずる正しき立場が立つ。精妙の意婉曲に隱るるとも、その言の正しさを傷くることなく、微妙の辭晦ま

されて露はならざるとも、その切實肝要を害ふことはない。かくして体要と微辭、正言と精義、ともに矛盾なく用ひられる、そこに聖人の文章を見ることが出來るのである。顏圖が孔子を譏つて、羽を飾つて更に畫くもの、徒らに美辭を事とすると謂つたといふが、聖人を誓らうとしてもそれは不可能にきまつてゐる。かく見れば聖人の文章の雅麗さは、固より華も實もあるものである。凡そ天道は聞き難きに、それすら猶ほ慕ふて止まぬを、容易に見得る聖人の文章を何故思はうとはせぬか。人若し聖人の文章に微を求めて言辭を立てるならば、始めてその文章は之を得たるに庶からう。

「是以子政論文必徵於聖、稚圭勸學必宗於經」。子政は劉向、稚圭は匡衡の字。匡衡は成帝の即位に當り、上疏して經學を勸めた。然しこの二句は唐の寫本に「是以論文必徵於聖、窺聖必宗於經」に作る。

こゝに引く易の文句は、繫辭下の「夫れ易は往を彰にして來を察し、顯を微にして幽を闡にす。開いて名に當て、物を辨じ言を正し、辭を斷ずるときは則ち備はる」とあるもので、開いて云々とはよく卦爻を解釋して、各卦名に相當させ、その物事を辨別してその言を正す。即ち卦爻の象徵を正しく取つて、彖象の辭を斷ずれば、よく吉凶を判斷し得るの意味である。之を引いて作者はよく事物を辨別して言辭を正すの意に用ひてゐる。書に云ふ云々は、言辭に切實肝要を尙び、好んで異を立てぬことで、体要を得ねば辭が立たぬ。辭を正しく立てるには異端に亙つてはならぬ。確固として体要を得たる文章は、徒らに異を好むの尤には陷らぬ。易の文は精義曲隱なるも、よく事理を辨別せる故にその正言を傷けず、春秋の文は微辭婉晦なれど、正しき義に立つ故にその体要を失はぬ。兎角婉曲隱微なる文章は要約を失ふて詭切繁雜に陷り易いが、この體要と微辭、正言と精義との偕に備つて些かも妨げたき

ものこそ聖經の文章である。かくの如く聖人の文章の見事さは、幸にも吾等今日尙之を知ることが出來る。莊子に見える顏闔の非難の如きは、當らざるも甚しく、まことに聖人の文章こそ深き精神を美しく表現した、內容表現、華實兼ね備つたものである。聖人の性と天道とを語らるゝことばは子貢ですらも聞き得なかつたといふに、兎角人は强ひて之を知らうとし、之に反して聖人の文章こそ、容易に「聞くを得べき」ものなるに、人は却つて之を思ひ之に倣はうとせぬのは何故か。聖人に徵を求めて文を作るならば、文章の道は之を得たるにちかしといふ可きであらう。

贊に曰く、

妙は生知に極まり、睿哲維れ宰す。精理文を爲し、秀氣采を成す。鑒は日月のごとく曬り、辭は山海のごとく富む。百齡影は徂くとも千載心は在り。

生れ乍らにして知る聖人こそ精妙の極。その聰明叡智は神幾の間を司る。故に宇宙の精理、天地の秀氣凝りあつまつてその文采を爲してゐる。その明は日月のごとく鑒みわたり、その辭は山海のごとく富かである。まことに現し世の身は百歲にすぎずとも、心は千歲の後までも傳るといふものである。

聖人孔子は凡そ政化事蹟修身のすべてに亘つて文を尙び、特に修辭に重きを置いたが、それには無論內に志足り情信にして、而も之が表現の巧みさき相俟つて始めて文章がかゞやくので、その文表現の法には、繁簡隱顯一ならず、各その時宜を得可く、その例はすべて聖經の中に示されてゐる。人もし文を爲るに聖人に證を取り、聖人の文章を師としてゆくならば、文を作るにまづ謬がないであらう。

宗經　第三

三極の彝訓、その書を經と言ふ。經なる者は恒久の至道、千古不滅の鴻教である。故に天地に象り、鬼神に效ひ、四時萬物の推移を參考して、人の道を設け、人間の魂の奥深くを洞察し、文章の骨髓を極めたものである。

此篇冒頭に先づ經とは天地人三才に亘つて常住不變の訓をしらせるものなるをいひ、且つその深意容易には知りがたきも、五經には夫々その特質あり、聖文の趣は決して一樣でない。經こそ文を爲るに汲めども盡きぬ寶庫であり、あらゆる後世の文體は皆經に原づき經より發せることを以下にのべるのである。

いにしへ三皇の世に三墳あり、五帝の代に五典あり、更に八索九邱の書ありといへど、歲月悠遠、枝流亂れ雜はる。孔子經典を刪述し給ふてより始めてこの經典といふ大寶は咸耀いた。こゝに於て易に十翼具はり、書は七觀を標し、詩は四始を列ね、禮は五經を正し、春秋に五例あり、その内容既に性情を極むる上に、その辭亦文理に巧を凝らした。故によく蒙を開き、正を養ひ、その昭明は遠く長くゆきわたつたのである。而もおよそ道心は微にして、聖人の謨は餘りにも卓絶し、牆宇重なり高うして窺ひがたきが如く、その言葉は自ら深遠である。譬へば萬斤の大鍾には俗耳に入り易き纖音無きがごとくである。

孔安國尙書の序に「伏犧神農黃帝の書を三墳といふ。(墳とは)大道の意味である。少昊顓頊高辛唐虞の書を五典といふ。(典とは)常道の意味である。八卦の說を八索と謂ふ。その義を求める(索)意味である。九州の地志を九邱といふ。邱とは聚の意、九州各地の土產、風氣の適不適が皆此書に聚められてゐる意味である」とあり、いづれも傳說

上の古き書きもので、その正體は知りがたい。六經の起源は前にも云ふ通り、まことに古く遠いが、孔子の刪述を經て始めて一樣に擢いたのである。易の十翼は已に前に出た。書の七觀とは尙書大傳に孔子曰、六誓は以て義を觀る可く、甫刑は以て誡を觀る可く、洪範は以て度を觀る可く、禹貢は以て事を觀る可く、臯陶は以て治を觀る可く、堯典は以て美を觀る可しとあるもの。詩の四始とは毛詩の序によれば風、大小雅、頌。鄭箋に之が王道興廢の由る所なる故に四始といふとあり。(三家詩說に於ては之と異る)。禮の五經とは祭統に禮に五經有り、祭よりも重きは莫し。鄭注に禮の五經とは吉凶賓軍嘉の五禮とする。春秋の五例は前篇に出た。之らがすべて備つて、その義理も文辭も見事に整ひ、昭明あまねく亘つたが、如何せん聖人の旨は餘りに高く深く、兎角俗耳には入り難いのであつた。

大體易は天道を語り、その精義神に入つて作用くもの、故に繫辭に曰ふ、その旨は遠く、その辭は文に、言よく中り事は隱ると。孔子易を讀んで韋編三絕すといふ、もとより哲人の深く思ひ求める所である。書は實に古の言を記るすもの、而も訓詁は已に茫昧として知り難いが、而も爾雅に通ずれば文意は明らかとなる。故に子夏は書をよみ歎じて云つた、昭々として日月の代る〳〵明かなるが如く、離々として星辰の行を錯ふるが如しと。その照り灼やくことを言つたのである。詩は志を言ふもの、その訓詁は又同じく爾雅による。諷を舒べ、興をとり、辭を飾つて婉曲に諫め、之を詘して溫柔なるが故に最も深く心に觸れる。禮は人のかくあるべき體制を確立し、事毎に一々細かに規範を定め、之を身に執り行つて始めて顯かに、又その禮經の中に採りあつめたる聖賢の片言は一として實に非るはない。春秋は義理を辨明し、一字によつて褒貶を示すもの、たとへば五石六鷁の條のごとき、詳略の筆をもて文を成し、雉門兩觀

の火災の條のごとき、よく事の先後をもてその旨を明らかにしてゐる。その文辞の婉曲なれど順序正しく、明らかに誌るせど露はならざる、まことに以て奥邃きものである。尚書は文を見れば詭奇詰屈なるが如きも、理を考へれば却つて暢達であり、春秋は辭を見れば立ちどころに理解し得るが如くして、その深意を求めれば却つて隱れて知り難い。此れ聖人の文のさまゞ〳〵に趣を殊にし、表裏体を異にして一ならざる所である。

以上易、書、詩、禮、春秋それゞ〳〵の特色、經典の文章の趣一ならざること。且つ詩書の訓詁は爾雅によつて明かとなるをいふ。易下繫に精義入神以致用也。又曰、其旨遠其辭文、其言曲而中、其事肆而隱。とあり。子夏歎書とは尚書大傳に、子夏が孔子に對へて「書の事を論ずるや、昭々として日月の明を代ふるが如く、離々として參辰の行を錯ふるが若し」と曰つたとあるもの。詩の擯風裁興云々とは詩の大序に「上は以て下を風化し、下は以て上を風刺す。文を主として諷諫し、之を言ふ者罪なく、之を聞く者以て戒むるに足る、故に風と曰ふ」とあり、風化風刺を擯べて、起興を適宜にとり、それとなく諫めること。禮以立體、一本その下に弘用の二字あり、立體弘用、自ら立つ原理を體とし、之が行事に見はるゝを用とする。禮は敬を以て體とし、和を以て用とするといふが如し。春秋の五石六鷁とは僖公十六年に「十有六年春王正月戊申朔、隕石于宋五。是月六鷁退飛過宋都」。穀梁傳及公羊傳の說くところによれば、はじめに隕といひ次に石といひ、更に宋といひ、後に五つといふは、先づ隕つと聞き、之を視れば石、落ちたる所は宋國の中、數へて見れば五つとのこと。之に反して後者は先づ目に何物か六つ飛ぶを見、よく見れば鷁、之が宋の都を飛びゆいたこと故、兩者筆法に先後を異にするといふ。更に隕石には日を記し、飛鷁には日を記さぬについても公羊、穀梁に各說あり。又定公二年夏五月壬辰雉門及兩觀災。この時の火災は兩觀から燒けて雉門

に及んだのであるが、雉門は尊く兩觀は微なる故雉門を先に出した。而も雉門災及兩觀と言はぬのは兩觀の方が火元であるからだといふ。かういふ風に春秋の筆法は一字をも苟めにせぬといふ例。婉章志晦は春秋五例(前出)の一つ。成公十四年傳に君子曰、春秋之稱、微而顯。志(微の反對)而晦。婉而成章。盡而不汙。懲惡而勸善。非聖人誰能修之とあり。

凡そ根底深うして始めて枝葉は茂るのであつて、その根ざす所深ければ、辭は約なれど意旨は豐かに、近きをいへど喻とす所は遠い。されば古のことは舊しといへど、その味ひは永く殘つて日に新なる意味をもつ。後進の者之を追ひ求むるも未だ晩からず、前賢已に久しく用ふれども未だ先だつて用ひ盡さず、たとへば泰山あまねく雨ふらし、河水千里を潤すものといふべきであらうか。

上に經典の文章の多趣多樣なるを云ひたるを受け、こゝに深く根ざして後人が文章を作るならば、實にそれは汲めどもつきぬ無盡の寶庫、日に新なる味ひを得るであらうといふ。

故に論說辭序は易からわかれ出て居り、詔策章奏は書から源を發してをり、賦頌歌讚は詩がその本を立て、銘誄箴祝は禮がその端を總べ、紀傳移(黃本作銘。朱謀㙔云當作移、唐寫本紀作記。銘作盟)檄は春秋が根と爲る。何れも最高の標準を立て、最大の範圍を啓いてゐるので、後世百家の書がいかに騰躍するとも終にその範圍内を出で得ぬ。後世各種の文體は皆經典にその源を發する。この章の系列と、本書明詩第六以下の文體の分類とを圖示すれば左の如し。

易……論說辭序……論說第十八

書……詔策章奏……詔策第十九
章表第二十二
奏啓第二十三
議對第二十四
書記第二十五

詩……賦頌歌讚……明詩第六
樂府第七
頌讚第九
詮賦第八

（楚辭）……辨騷第五……

雜文第十四
諧隱第十五

禮……銘誄箴祝……祝盟第十
銘箴第十一
誄碑第十二
哀弔第十三
封禪第二十一

春秋……紀傳移檄……史傳　第十六
　　檄移　第二十
百家……諸子第十七

この中詩と楚辭と賦との關係については辨騷第五の項に詳述しよう。

若し經に禀けて法式を製し、雅詩を參酌して言を富ますならば、是こそ山に卽いて銅を鑄、海を煮て鹽となすの類、取れどもつきぬものがあらう。故に文章によく經を宗とするならば、文の體に六つの法則あることになる。一には情深うして詭なく、二には風格清うして不純なく、三には事信實にして妄ならず、四には義直にして回ならず、五には體しまりて蕪雜ならず、六には文麗しうして而も淫華ならず、楊雄は之を玉を雕つて器となすにたとへたが、それは五經のもつ文采を謂つたのである。

經典の文章に本づいて文を爲るの効果。こゝにいふ六義は言を簡にして現せば徵聖篇にいふ「情信而辭巧」なるものであらう。楊子云々は法言に「玉彫らずんば珙璠も器と作らず、言文ならずんば典謨も經と作らず」とあるをいふ。言に文采ありてこそ經の經たる所以とまで稱してゐるのである。

夫れ文は行を以て立ち、行は文を以て傳はる、文と行とは孔門の四教に先づ擧げられる所、この兩者相俟つところに美しき文采が生ずる。凡そ德行をたかくし、聲教を立てるについては誰しも聖人を師とせぬはなきに、之と相俟つべき立言修辭についてよく經典に本づかうとするものは稀である。さればこそ後世楚辭は豔に流れ、漢の文は侈に陷つた。その弊一度び流れては元に還らぬ。このとき、末を正して本に歸るは、もとより驚しいことではあるまいか。

孔子は四つを以て教へた。曰く文行忠信(論語述而篇)。文と行とは相俟つ可きもの。德行に於て孔子を鑽仰するならば、文辭に於ても亦孔子刪述の經典を宗とす可きである。然るに之を忽せにした結果、後世の文は豔に流れ侈に耽る、上に揚げた文の六義とは反對に、情は詭り、風は濁り、事は妄に、義は邪に、体は蕪に、文は淫となつてゆくのである。この時に當つてこの流弊の末を正し、根本の經に歸ることこそ劉勰の論旨の眼目であつた。

贊に曰く、三極の彝道、訓、稽古に深し。(鈴木博士云道訓二字顚倒か。)化を致しては一に歸し(唐寫本作惟一)、教を分つては斯れ五とす。性靈の鎔匠、文章の奥府。淵い哉、鑠やける哉。群言の祖なり。

經は天地人三才の常道。古を稽へて深き訓がこゝに在る。化を致しては一に歸し、教を分つては五經と爲す。經こそ人の心情を陶鑄するもの。文章の奥ふかき寶庫。深い哉、耀ける哉。經こそあらゆる文辭文章の祖宗である。